

おはようございます。マイクの前でみ言葉を語ったり、放送に流したりということはありましたけれども、カメラの前でというのは初めてなので、皆さんと共にこういう形で礼拝をささげるような、今は時なのだということ、非常に不思議に感じております。

お祈りをもって、今朝のみ言葉に聞いてまいりましょう。

この天地を創り秩序と美しさをもって私たちを育ておられる神様。あなたの尊い御名を賛美致します。主イエスキリストの復活を記念する週の最初の日、私共はあなた様に礼拝をささげております。けれどもこれまでとは違い、共に集うことができずオンラインでの礼拝が続いております。また辛いことではありますけれども、このような形でも会うことが出来ない兄弟姉妹がおり、週報をお届けするなどということ、何とか交わりを保っているというようなことでございます。今、私達には、お店を開けることが出来ない、外出することにも制限がある、顔を合わせて逢いたい人にも会えない、そのような状況がございます。何よりもこの地上にいる人の命が危険にさらされているという、言葉に表すことの出来ない苦しみの中に置かれております。主よなぜですか、どうしてこのような苦しみに合わせるのですかと、思わず訴えてしまうのです。そのような私達を、主よ、憐れんでください。不安や恐れを取り除いてください。忍耐を与え、日々の生活を快適に過ごす道を見出して、前に向かって進めるよう力を与えてください。教会の仲間だけでなく、特に多くの困難の中で医療に従事している方々に、力と知恵とそして必要な器具を与え、病気の癒しと共に感染拡大の防止に努めさせてください。

今朝も担当の兄弟姉妹の尊いご奉仕によって礼拝をささげ、人々に届けることが出来ます事を感謝致します。今しばらくの時このオンライン礼拝がスムーズに行われる様お守りください。私達はあなたの御言葉にこそ、命が、癒しがあると信じております。今朝も開かれている御言葉から、新しい週を生きる糧を頂くことが出来ますように。初めてこのライブ礼拝にアクセスして下さった方々をも祝福し、平安をお与えください。主にある諸教会、その礼拝と交わりにあなたの栄光が表されますように。共に集うという教会の営みが回復される日が速やかに来ますように。またそのために私達も努めることが出来ますように。主イエスキリストの御名によってお祈りを致します。

アーメン

I 序論

先週ある方から一服のお茶が送られて参りました。封を開けて美味しく頂いたわけです。この時勢、オンライン飲み会が盛況だと聞きます。ELCでもオンラインのレッスンが行われておりますけれども、オンラインティータイムということで、飲み物を片手にフリートークの時を持っております。くれぐれもコーヒーをパソコンの上にこぼさないようにしていただきたいと思いますが。実はこの送られてきたお茶というのは、封筒に入っていた一枚の飛び出す絵になっていたんですね。（持参して手に持っているものに）カメラが寄ることではできないかと思っておりますけれども、このようなお茶を頂きました。液体では



なく封筒に入っているお手紙だったのです。けれどもその方を思い起こしながら、実際に一服のお茶を点て、その後、「結構なお点前でした」と早速メッセージをお返し致しました。こんな時だからこそ、送って下さったのだと思います。その方の遊び心にちょっとほっこりさせられたわけです。皆さまはどのような日々を過ごしておられるでしょうか。

このゴールデンウィーク、春日部大風マラソンは中止になりましたので、昔読んだか、あるいは読まなかったか、大変記憶があいまいなのですが、カミュの『ペスト』を読みました。改めて購入をしたのですが、この時期、随分と出版されたようですね。ペストというのは、ペスト菌によってもたらされる非常に致死率の高い伝染病であるわけです。何度も流行の時があったそうで、特にヨーロッパでは、多くの人たちがこのペストによって亡くなりました。ですからペストという言葉は疫病を代表する言葉にもなったわけです。聖書の中に「この男はまるでペストのような人間です」と、パウロをなじる場面もあります。使徒の働き 24 章 5 節ですけれども、もっともこの言い方というのは、新改訳聖書の第 3 版までの訳でありまして、今の新しい訳では「この男はまるで疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人の一派の首謀者であります」となっているわけです。かつての訳の方がインパクトがあったかなというような気が致します。それはともかくこの小説の「ペスト」というのは、第二次世界大戦が終わりまして 1947 年に出版された本ですが、数年かかって書かれたものと言われています。ペストが発生してロックダウン、封鎖されたアルジェリアの街で起きた様々な出来事が描かれているわけです。けれどもそれは正に今、日本や世界が経験している、そこで起きている事柄と見事に重なっています。ある意味予言的な小説でもあったんだなあと、改めて思わされた次第です。この小説は、ペストの感染が抑えられたという所で終わっています。現実の私達は、また私たちの住んでいる世界は、今の騒ぎが収束した後、どのような生活になるのでしょうか。また感染の拡大が抑えられていく、大きく押さえ込まれたその時の生活というのは、どのようなものになっていくのでしょうか。新しい生活様式が公表されて、それも各種報道から耳にされて、どうやってこれから生きていこうかな、どんな風にして過ごそうかな、と思っておられると思います。落ち着いた生活を取り戻したいということから言えば、今までと同じ生活が行われることが望ましいのかもしれないけれども、これまでも全く同じ生活様式になることはないと思います。いやむしろ変わらなければならないところがあるのではないのでしょうか。大都会に集中する生活、インバウンドに頼りきりの観光、あるいはまた海外の資源や製品に依存しすぎる生活など、変えていかなければならないことは多々あると思います。

Ⅱ ダビデの悔い改め

教会においては、共に集まって祈り合うというのが健全な姿であると思うのですが、やがてそういう日がやってくると思うのですね。しかしながらその時、今までと同じでいいのか、教会もまた新しくされ、私達の交わりもまた新しくされていかなければ、この苦しみにはどんな意味があったのかと、逆に訝ってしまうわけです。

今日は 10 節にあります「新しくしてください」という、この御言葉を中心に詩篇の 51 篇に聞いて参りたいと思います。この詩篇の 51 篇は、“七つの悔い改めの詩篇”の一つです。ヘブル語聖書では 1 節ですけれども、私共の持っている聖書では、表題にこの詩篇 51 篇の背景となった出来事が簡単に書いてあります。「指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバと通じた後、預言者ナタンが彼のもとに来たときに」。この出来事の詳細はサムエル記第二の 11 章と 12 章に書

かれています。時は紀元前 1000 年を少し過ぎた頃、場所はエルサレム。この当時イスラエルの全軍勢は戦いのために出払っておりました。けれども一人ダビデは王宮に留まっていたわけです。ある日王宮の屋上を歩いておりましたと、一人の女性が目に入った。早速彼女を招き入れまして、ベッドを共に致します。ウリヤと言う家来の妻、バテ・シェバという人でした。その後彼女が妊娠したことが分かりますと、夫ウリヤを戦場からエルサレムに呼び戻します。「家に帰ってゆっくりするように。」とダビデは言うのでありますけれども、まあ律儀なウリヤは、「いやいや、仲間が厳しい戦場で戦っているのに、自分ひとりだけ家に帰るなどということは出来ません」と言って、王様のもてなしは受けましたけれども家に帰ることはありませんでした。そこでダビデは、彼を戦場の激しいところに送り出して、そして死に至らしめます。いわば、姦淫と殺人の罪を犯したというわけです。かつ、そのことを隠していた、不誠実の罪も加えていいと思います。そこに預言者ナタンが現れまして、「あなたのしたことは神の御心に背いた過ちである」と諫めるわけです。実のところ深い苦しみの谷にいたダビデは、預言者ナタンの声に耳を傾け、神の前に罪を悔い改めたのでした。この人生一大汚点ともいえる出来事の後、ダビデは新しい人となって、神と人ともに仕える者となったのです。これが詩篇 51 篇の生まれた背景にある出来事です。私がすごいなと思うのは、ダビデはそのような過ちをこのような詩篇に歌っている。しかも、「指揮者のために」と書いてありますから、公に礼拝で歌う歌にもなって、残しているということですね。

私達は自分の汚点というものを、人知れず隠しておきたいと思い、そういうことはなかったことにしておこう、自分の胸にだけ秘めておこうと思うわけです。やはり偉大なダビデの姿がここに表れていると思います。似たような話が新約聖書にも出てまいります。時は紀元一世紀の前半、主イエスが福音を宣べ伝えておられた時代です。当時の預言者バプテスマのヨハネはある時、ユダヤを治めていた国主ヘロデ・アンテパスの悪事を暴き、彼に告げます。「異母兄弟ヘロデ・ピリポの妻と通じて、自分の妻としたことは大きな罪である」。悔い改めを迫りました。しかしヘロデはヨハネの言うことには耳を貸さず、投獄してしまい、ついには彼の首をはねさせます。ヘロデは後にイエスを人々の手に引き渡す人物として、再び聖書に登場してきます。

Ⅲ 向きを変える

私達はどうでしょうか。「あなたのここが間違っていますよ」そう言ってくれる人の言葉に素直に耳を傾け、悔いた砕かれた心をもって新しい歩みを始めるでしょうか。それとも自分自身の正しさを主張し、人の言葉を聞き入れないどころか、そのようなことを言ってくれる人はうるさい人だ、と、邪険に思う、そんな振る舞いをしてしまうかもしれません。

イスラエルの国家の礎を築いたダビデ、片やヨハネやイエスを死に追いやる人となるヘロデ。新しい人になるのか、それとも自己中心の古い人のままでいるのか。その分かれ道は、自分に語られた神の言葉を聞くか否かによるのでした。“悔い改め”という言葉は、教会の言葉として、キリスト教の言葉としてよく使われます。悔い改めというのは、単に自分の過ちを反省したり、懺悔するということとは違うわけです。その意味は“方向転換”です。新しい方向に向いていく、自分ではなくて神様の方に私達の向きを変えることですよね。ダビデはナタンから諫められた時、「自分は神の前に罪を犯した」と、神の前に罪を犯したことを認めました。ルカの福音書の 15 章に放蕩息子のたとえ話が出てまいります。ふたり兄弟の弟が、お父さんの財産を譲り受けて遠い国に旅立ち、そして、身を持ち崩してしまいます。ハッと気づいた時の告白も同じでしたね。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前にも罪ある者です。」と言うわけです。この弟息子もまたこの時

点で、その心は砕かれていたと言えます。このことは重要です。ダビデはバテ・シェバやウリヤに対して大きな罪を犯したけれども、それと共に自分の行ったことは、神に対しての罪である、神の前に罪を犯した、ということに気づかされたわけです。なるほど多くの方は、このダビデのようなひどい極悪非道なことはしておられないでしょう。けれどもあなたの心は神に向いているでしょうか。今の時代、このように場所や時間に制約されることなく、ライブじゃなくてもオンライン礼拝という形で礼拝をささげることが出来ます。でもあなたのいる所が本当に礼拝をする場所になっているでしょうか。どこにいても私達の思いが、全身全霊が、神様ご自身に向いていることを、本当に祈ります。

現在私達の周りで起きていることで分かったことは、一人の人間、あるいは一つの国家の自己中心性であると思います。リスクゼロを求めるあまり、自分を正しいとして他人を攻撃し、社会や交わりが分断されるということです。医療の最前線やこの問題の解決のために懸命に努力している方々がおられる一方で、目に見えないウィルスよりも恐ろしい人間のありようが見えてきているわけです。人の罪は、生まれ落ちたその時からもうすべての人についてまわっているわけです。「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることはできず」とローマ人への手紙 3 章 23 節にある通りです。神を締め出し、自分中心になっていることこそ、罪の姿であるわけです。けれどもダビデは、自らのうちに、神の前に罪を犯した人間であると神に背いている姿を認めて、神様に思いを向けました。10 節にはダビデの祈りが記されています。もう一度お読みいたします。「神よ 私にきよい心を造り 揺るがない霊を 私のうちに新しくしてください」。神様に心に向けることが、人が新たにされていくことの第一歩となっていくわけです。それに続く 11 節から 15 節は、新しくされた者として、神の救いにあずかった喜びを取り戻し、人々に仕える者として神の道を教え、民を正しく導き、神を賛美するものとして生きよう、というその決心が表されています。「あなたの救いの喜びを私に戻し 仕えることを喜ぶ霊で 私をささえてください」。

救われて間もない頃は、喜びに満ちて神にも人にも仕えていたなあ、今はどうかなと、ちょっと思った方は、もう一度心に主の御言葉を思い起こして、神様に心に向けていただきたいのです。ある人は言うかもしれません。「この話っていうのはちょっと良く出来すぎてはいないか。ダビデのような高い地位にあった人が、こんなひどいことをしたならば、やはり王の位を辞めてそれで責任をとるべきだ」。もう少し違った言い方をすれば、「もう腹を切って死んでお詫びをしろ」というような声も聞こえてきそうです。けれどもそれは神様を認めない人の言い分です。今日はもう触れませんが、実はバテ・シェバに赤ちゃんが生まれます。しかしその赤ちゃんは死んでしまうのですね。

ダビデは新しくされました。王として留まりましたけれども、多分ずっとそのことを心のどこかに留めながら生きて来たのじゃないでしょうか。新しい人とされて全部万歳だと、彼は生涯を送ったわけではないと思うのですね。これは別のテーマになりますからここでは触れませんが、そのような痛みを持ちながらダビデは王位に留まり、神と人ともに仕えて行ったということです。

IV 神の秩序の中に

ダビデが神様に心に向けたことが分かるのは、この 10 節の「私にきよい心を造り」という“造り”という言葉からです。この言葉は創世記 1 章 1 節「はじめに神が天と地を創造された」の“創造した”という言葉と同じです。人が新しくされるのは、実は神様の業なのです。ダビデは自分の罪を認めるとともに、罪を赦し新しく作り変えてくださるのは創造主である神しかいないと悟った

わけです。

イエス様が十字架にかかれたときに、苦しみの中でまず祈られたのは、「父よ。彼らをお赦してください」という赦しの祈りでした。罪の悔い改め、そしてこのイエスを信じることにより人は新しくされる。それは神様の業です。私達は今後新しい生活様式に沿って生活することが求められ、またそのことを心に留めて過ごすことになると思います。専門家の方々の提言を受けて作られたものですから、これを大切にしていきたいと思います。けれどもそれだけでいいのか、最も大切なこと、神によって造られた世界の秩序を取り戻すということが無ければ、新しい生活様式になる、新しい生活になるとは言えないと思います。これは私の個人的な私見ではありますがけれども、今回の出来事は神様の裁きというよりは、人類に対する警告であると捉えています。詩篇の 51 篇に例えれば、ダビデにものを言ったナタンのようなものです。ナタンの言葉に聞くのか聞かないのか、ある意味、コロナの手紙に聞かなければならないことがあるのじゃないでしょうか。人類の歴史の営みには、これまでも自然災害がありました。感染症の蔓延もありました。戦争は今なおこの地球上に起きています。人の生活と命を脅かすことは次々に起きているわけです。まことにそれは理不尽なことであり、カミュが描いたように不条理な世界でもあるわけです。けれどもこのような不幸が起きたのは、人間の身勝手さによる、そういったこともあるのではないのでしょうか。自然災害で終わらず、人の手が加わっていたことで被害がより甚大になるということがありました。便利さを求める生活、スピードを求める社会が却ってリスクを産んでしまっているわけです。毎日のように起きている交通事故はその最たるものだと思います。良く「自然と仲良く暮らそう」とか、「自然に聞け」とか言われます。その通りです。私の言葉で言えば、「この世界を造られた神の創造の秩序に倣え」と言うことです。人間はどこまでも傲慢なのです。私達はこの機会に創造主である神様の造られた秩序の中にもう一度しっかりと身を置いて、新しい者とされ、新しい生活を歩んでいく必要があるわけです。このような時、若い人達が志をもって、ある事柄に立ち向かっていく、そういったこともあります。キリスト者であっても、ある意味、言葉はあまりよくないかもしれませんが、野心がなくなっただけだと思えるのです。自分だったらこうしよう、と思ったり考えたりするわけです。

V 砕かれた心

けれどもこの高い志も、神様を忘れ、自分自身を義とすることと紙一重であるということに注意しなければなりません。色々な出来事の中で、語っておられる神の言葉を聴く。それはスピーカーから出てくる音声のように聞くということではありません。自分の経験した苦しみの中に神様の憐みがある、全く受け入れ難い辛いことではあるけれども、そこにある神様の愛に気づく。このことがとても大切なことで、それは私達の心が砕かれて低くされていなければ分からないことです。ですから、神の喜ばれることは何か、それは砕かれた心であると歌うのです。16 節と 17 節をご覧ください。「まことに 私が供えても あなたはいけにえを喜ばれず 全焼のささげ物も望まれません。神へのいけにえは 砕かれた霊。打たれ 砕かれた心。神よ あなたはそれを蔑まれません」。詩篇の 34 篇 18 節には、「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、霊の砕かれた者を救われる」とあります。

オリーブオイルを料理に使われることがあるかと思いますが。オリーブの実をプレスして絞った純粋なものがエキストラバージンオイル、と言われるわけですね。最高級の不純物の入っていないものです。イエス様の時代、さらに絞って種まで潰されて出来た油がありました。不純物が入ってい

るのですね。濾したといってもつぶれた種の粒々が入っている。それはランプの灯火の油として使われました。捨てられることはなかったというのです。私達が砕かれて、全く失われるような者であったとしても、神様は私達をお捨てにはなりません。むしろ砕かれたからこそ生かしてくださるのです。ダビデが、姦淫と殺人、そして不誠実という極悪非道な罪を犯し、そのような者であったにも拘わらず、彼は砕かれて新しくされて、イスラエルの王として生涯を全う致しました。

「誰でもキリストのうちにあるならその人は新しく造られたものです。古いものは過ぎ去って、見よ。すべてが新しくなりました」。これは神様があなたにしてくださる創造の御業なのです。神様の大きな愛、憐れみの中で私達は新しくされて参ります。苦しく辛い今いる所から脱出することが出来るのか、そのような思いの中に囚われていたとしても、神様はその道を示してくださるのです。この小説「ペスト」の後半に、医師のルイーが、自分の身をぽっかりと海に浮かべて夜空を見上げる、そういう場面があります。ペストに侵されていく人間の悲惨な悪の姿が描かれているその小説の中で唯一ホッとする場面だと思いました。著者のカミュの意図したことではないと思いますけれども、私はこの場面は憐れみ深い神様の懐に抱かれた安心しきっているイメージに重なったのですね。そして一つのことを思い起こさせてくれました。それは子供の頃泳げるようになったという経験です。変な言い方ですけど、日本海が私に泳ぎを教えてくれました。家族で泳ぎに行きました。岩がごつごつした海岸。遠くずっと浅い海岸。切り立った崖がすぐそばまでいきり立っている海岸。このような三つの種類の海水浴場があったように思います。行きたての頃、父親が私を抱いて海の中に投げ込むのですね。当然もがいて沈んでしまいます。そうすると父は言うわけです。「そのままにしていれば、人間は自然に浮くのだよ」。確かにそのままにしているとだんだん浮かんでくるわけですね。やがてぽかっと仰向けになって真っ青な空を見上げる。そんな快感を味わうようになりました。力を入れて固まっているから沈んでしまうのです。大きな海原に身を委ねたらそのまま浮かんでまいります。そしてやがて泳ぎを覚えていった。そんなことをこの小説の一場面を読んで思い起こしました。自分の罪に気付かされた時、その心を頑なにするのではなく砕かれてありのままの姿になって、海原よりも大きな神様の愛の中に身を委ねてみることです。

VI 主よ、新しくしてください

私達はすでに神様の愛の中に、赦しの中に置かれています。イエス・キリストの十字架は、人の罪を赦すだけではなく、私達を新しく造り変えてくださるシンボルとなったともいえるでしょう。この世界を造られた神様が、私達を新しく造り変えてくださるのです。主よ、新しくしてください。私を新しくしてください。これを私達の今週の祈りとして、一日一日を刻ませていただきますように。

お祈りをささげます。

全能なる父なる神様。あなたは、罪を悔い改め、あなたに立ち返るすべての者を受け入れ、新しくしてくださるお方です。それは人の手によらない神の創造の御業にたとえることが出来ます。今朝私達はあなたの前に砕かれ、新しい人とされたいと願っております。幸いなことに、「主の憐みは朝毎に新しい」という御言葉があります。主よ。私達を、私を新しくしてください。この祈りを忘れることなく、1週間を過ごすことが出来ますように。イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。